

昆虫のからだのつくりの共通性を、実感を伴ってとらえるために

(1) 自分たちで捕まえた昆虫を使う

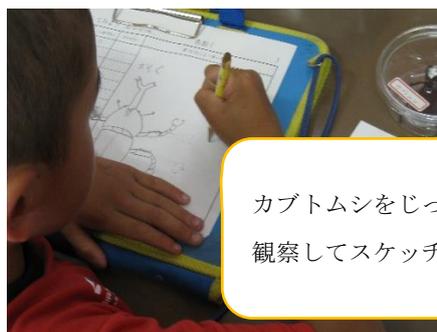
昆虫の観察をするにあたり、できるだけ写真ではなく実物を使って観察をさせたいものです。そのためには、昆虫を捕まえる必要がでてきますが、学級の中には昆虫が嫌いという児童が必ずといっていいほどいます。しかし、だからこそ教師が準備するのではなく、子ども達自身に昆虫を捕まえさせたいものです。これまでに昆虫を触ったことのない児童、虫捕りをしたことがない児童がいるからこそ、経験させたいのです。

単元の導入。「昆虫を捕まえに行こう。」の一言で、子ども達は喜んで外へ出ていき、昆虫を捕まえます。昆虫の苦手な子も、校庭の石をひっくり返して、ダンゴムシを捕まえ始めました。そして、子ども達が捕まえてくるこのダンゴムシが、次の授業の大切な教材となります。

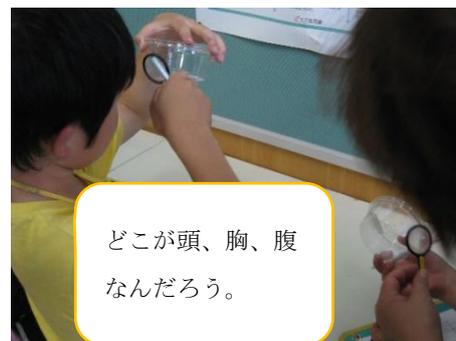
(2) 思考のズレを生かした問題提起

子ども達が捕まえてきた『むし』をケースに入れ、続きの授業を始めます。導入では、モンシロチョウをもとに、昆虫の体のつくりの定義を確認しました。その後、子ども達が捕まえてきたダンゴムシとその写真を提示し、「ダンゴムシも昆虫だろうか。」と投げかけると、脚の数から、すぐにダンゴムシは昆虫ではないと気づきます。ここに、自分が昆虫だと思って捕まえてきたのに昆虫ではなかったという思考のズレが生じます。さらに「みんなが捕まえてきたのは本当に昆虫だろうか。」と発問すると、自分たちが昆虫だろうと思って捕まえてきた『むし』は、昆虫ではないかもしれないという疑いが生じます。自分で捕まえたからこそその思考のズレです。今までじっくりと昆虫のからだを観察したことのない子ども達は、必死にそのからだのつくりの特徴を思い返し、どれが昆虫でないか予想します。こうなると、すぐに調べずにはいられません。こうして、昆虫のからだのつくりの定義と照らし合わせながら、意欲的な観察が始まります。

観察を進めると、「どこが頭・胸・腹なのか。」「脚なのか手なのか。」等、ますます疑問がうまれ、自然と話し合いが始まります。今回の授業では、前脚が見えづらい「アメンボ」が、話し合いの争点となりました。みんなでケースの下から観察したり、エサを入れたりして、何とか前脚を見ようとチャレンジしました。こうして主体的に、そして、実感を伴いながら、昆虫のからだのつくりの共通性をとらえていきました。



カブトムシをじっくり観察してスケッチ。



どこが頭、胸、腹なんだろう。



アメンボにエサを入れて前脚の観察。見えるかな？